

(様式1)

令和6年度 学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立立花吾嬬の森小学校
校長名	向井 一郎

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">・国語科については、「思考・判断・表現」が2・3・5学年において、全国平均値をうまわり、5年においては5ポイント近く上回っている。「主体的に取り組む態度」は、3・4・5学年は5ポイント以上高まっている。このように国語の平均正答率が目標値を超えている部分が多く、国語の基礎力が定着していることが読み取れる。・算数科については、特に2，3年が3観点において、平均5ポイント以上上回っており、力が確実についていることが読み取れる。・社会科は、5・6学年の「知識・技能」が約2ポイント、第5学年の「主体的に取り組む態度」が1ポイント高まっている。・英語については、「知識・技能」が目標値を約5ポイント上回っている。	<ul style="list-style-type: none">・国語科については、総じて力が定着している中、4・6学年の「知識・技能」が全国平均値より、約8ポイント下回っている。・算数科の「思考・判断・表現」については4，6年の数値が全国平均値よりも、それぞれ3ポイント以上下回っている。・第4学年は、社会、理科において平均を下回っている項目がある。特に「知識・技能」の数値が約5ポイント下がっている。・第5学年については、国語、社会、算数において「思考・判断・表現」の数値が全国平均値よりも、平均5ポイント数値が低くなっている。各教科の核となる部分である。・学年共通で、長文を読み取る問題で誤答、無回答のない児童が目立った。(平均17.14%の児童)・第6学年の英語については、「思考・判断・表現」、「主体的に取り組む態度」のポイントが、全国平均値をそれぞれ3.6と15.1ポイントと大きく下回り、改善していく必要がある。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">・全校の94.2%の児童が学校生活を楽しく送り、自分のクラスを好きだと言っている。・どの学年も家庭における生活習慣が整いつつある。家庭学習の提出率も高い。(84%以上)である。家庭の学習への関心も高い。・高学年になるほど、学習意欲が高まっている。毎日の学習が楽しいとしている児童は全校の90.9%となっている。	<ul style="list-style-type: none">・進んで学習に取り組んでいるとしている児童は、全校の87.9%であるが、12.1%の児童の意欲を高めることは最大の課題である。・発表の意欲に関しても86%がその意志がある中で14%の児童の意欲を高める必要がある。・疑問を追求しようとする意欲が全体では88.4%であるが、学年が上がるにつれて下がっている。(5年、6年 55%)

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・全学級においてほぼ全員の児童が、家庭学習に取り組むことができている。 ・振り返りシートや復習問題に意欲的に取り組む姿が、どの学年でも多く見られている。 ・全校で読書量が増えている。読書への意欲が高まっている。(貸し出しの実績データから) ・課題を見つけ、それを解き明かしていく学習への意欲が見られる。(図書館で調べる学習への意欲が高まり、3年生以上ではほぼ全員が取り組んでいる。) ・「立吾しぐさ」を守ろうという意識が強く、全学年で規範意識が平均値を超えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・提出はされていても、取組の仕方に差がある。更に家庭との連携が必要である。 ・ミライシードを使用するタイミングと、その内容を検討し、学習に生かすようにする。 ・学校図書館の本の種類、冊数も増え、利用が増え、読書数も増えているが、選んだ書物が児童の年齢に適していない場合もある。読書の質を高める必要がある。 ・図書を通してはもちろん、ネット上の情報の適切な選択・活用の指導が更に不可欠である。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 基礎・基本の定着

- 授業の中で、導入場面、調べて考える場面、友達と交流をする場面、そして、考えを深める場面を用意し、単調で教師主導型の授業にならないようにする。
- ロイロノートの活用を日常化し、児童相互の交流や、教師とのやりとりを通して、考えを発表したり、深めたりすることをさらに進める。
- タブレット端末を活用し、家庭との連携を図り、学校で学んだことが家庭でも振り返ることができるようにする。宿題も授業の復習、家庭学習につながるものを中心とする。
- ミライシード、東京ベーシック・ドリルを効果的に活用し、学習を進めるときに、土台となる前学習を「ふり返し」の時間を設ける。(タブレット端末も効果的に活用する。)
- 単元の中で、必要に応じて「ふり返しプリント」により振り返る時間を設ける。また、テストなどを行った場合にも、答え合わせ、間違い直しなどを確実にを行うようにする。

(2) 「読むこと・書くこと・話すこと」の力を高め、言語への関心を高める。

- 「読む力」を高めるために「読書活動」の充実を図り、学校図書館の整備、蔵書の充実を進める。特に、調べ学習に適した書物を重点的に増やす。「図書館を使った調べ学習」も継続する。
- 「朝学習」「授業時間」に、ふり返し学習の時間を設け「読み取り学習」に重点をおいたドリルを選び取り組んでいく。
- すべての教科指導の中で自分の考えを自分の言葉で書く場面を用意し、互いに交流させながら、考えを深める場面を作る。また、ノートなどに記したことを読み返して復習できるようにする。
- 発達段階に応じて、三行日記、スピーチ原稿、聞き取りカード、日記などを書く場面を多く設けるようにし、書くことへの抵抗感を減らしていく。
- 英語については、単語を覚え、読み、書くことも繰り返し行う。
- 「読む・書く・話す活動」を学級活動場面だけでなく、特活などの日常生活場面でも増やす。

- 3年生からは、国語以外でも、わからない言葉に関心を向けるようにし、児童の「語彙」が増えるようにし、携帯している国語辞典を積極的に活用していくようにする。

(3) 主体的・対話的で深い学びの実現＝自ら学び自ら考える児童の育成

- 「立吾しぐさ」の徹底、特に「聞き目・聞き耳」を重点とし、相手を意識して話したり、相手の話の内容を理解しながら聞いたりすることを大事にしていく。
- 校内研究・研修を充実させ、教師の指導力を高める。今年度は校内研究のテーマを「自ら学び 自ら考える児童の育成」とした。昨年度、「地域教材を活用して」というサブテーマで地域教材を通して考える場面をつくった。その結果、児童が「不思議だな」と感じたことを調べて考えることが出来た。今年度は「読解力の育成を通して」のサブテーマで、教材文や資料から読み取ったことをもとにして考えることに重点をおくこととした。読書数は増えていても、実際には内容を確実に読むことが出来ていなかったり、学力調査などにおいても、問題文で問われていることが理解できなかったり、それに対して自分の考えを表現することが苦手な児童が多いことから「読解力の向上」に重点をおくこととした。
- タブレット端末の効果的な活用により自ら学ぼうとする児童を育てる
学んだことを理解し、それを他者に発信することでより理解が深まっていく。タブレット端末は、調べるため、学びを進めるためのツールとしてだけでなく、学んだことを発信する道具として活用するようにする。

3 「令和7年度 墨田区学習状況調査」における目標

- ・D層の児童の個別指導を強化し、C,B層に上がっていくことができるようにする。C層児童が上がることも目指す。D層児童は現在平均して各学年に20%いる。これが10%になることを目指す。
 - ・国語においては、長文読解問題において空欄のまま提出する児童が、2年(20.7%)3年(10.4%)4年(8.9%)5年(15.3%)6年(30.4%)いる。問題に解答する際に、空欄のままということがなくなるようにする。
 - ・社会科については、資料の読み取りが確実にできるようにするために、日常の学習の中でも、グラフ、絵図等から発見ができる力をみがき、問題を解く際にも其の力を生かすことができるようにする。
 - ・算数については、日常の授業の中でも多様な考えがあることを実感させ、問題に答える時にも自分の考えを自信をもって表現できるようにする。
 - ・理科において実際に観察し、実験することを増やし、実感的な理解ができるようにする。
 - ・高学年の英語指導において、英単語の語彙数を増やし、読み、書き、話すことの基礎を確かなものにする。
- 全教科を通して、日々の授業の中でふりかえりの時間を設け、アウトプットの機会を確実に設定することで、学んだことが確実に定着し、次の学習に生かしていくことができるようにする。**